高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連¹

関西大学 妹尾香織²・高木修

Helping behavior and psychosocial well-being in elderly people

Kaori Senoo (Graduate School of Social Psychology, Kansai University, Yamate-cho, Suita 564-0073) and Osamu Takagi (School of Sociology, Kansai University, Yamate-cho, Suita 564-0073)

This study examined relationship between everyday helping behaviors and psychosocial well-being in elderly people. Elderly people attending an institute for adult education ($n=471$), age ranged from 57 to 82, participated in the study. They completed questionnaires that assessed the following variables: everyday helping behaviors, psychological reactions to helping, and psychosocial well-being, defined as self-esteem, moral, and social integration. The data indicated that psychological reactions resulting from helping consisted of three components: "positive effects on the self and others," "negative effects on the self and others," and "positive effects on the self." The helper's psychological reactions to helping had a significant effect on self-esteem, moral, and social integration. There were gender differences in the effect of these variables. These results suggest that an affirmative helping experience in everyday life provides elderly people with a feeling of psychosocial well-being.

Key words: helping behavior, functions of helping behavior, psychosocial well-being, elderly.

他者に恩恵を与えることを意図して行う自発的な行為は、日常生活においては、親切、人助け、手伝い、募金、ボランティア活動などのさまざまな形の援助行動として現れている (Spacapan & Oskamp, 1992; 高木, 1998)。従来、援助は本来好ましい行動であり、ゆえに援助を提供する行為は社会的に高い価値を持つとポジティブに評価され、一方、援助を要請する行為は、被援助者の独立心や能力感を脅かし、また、援助を受容する行為は、被援助者に負債感を経験させるとネガティブに評価されてきた (Fisher, Nadlar, & DePaulo, 1983; 西川, 1997)。

今日、高齢者は、高齢社会に向けて取り組むべき社会的課題の一つとされ、さまざまな分野において社会的、個人的な対処法が模索されている (田尾・西村・藤田, 2003)。社会的支援の対象者として認知されている高齢者が、援助者の立場で積極的に他者を援助するならば、その行動経験と高齢者の心理・社会的幸福・安寧感とはどのように結びつくのだろうか。

近年の社会心理学の領域における援助行動研究で

は、従来援助の受け手として認知され、また処遇されてきた高齢者についても援助の担い手として位置づけ、彼らのボランティア意識と活動実態および日常的な援助行動が国内外で検討され、高齢者が援助者として行動し得る可能性やそのような行動が果たす心理的機能に着目した研究がなされ始めている (Midlarsky & Kahana, 1994; 妹尾・高木, 2002a, 2002b, 2003; 妹尾・高木・箱井, 2000; 高木・妹尾, 2002)。例えば、高木・妹尾 (2002) は、高齢者が日頃近隣社会において身近な人々との間で取り交わす援助に着目して、援助の授与や要請および受容の3側面の行動実態を援助者と被援助者の両立場から同時に接近し、高齢者は、援助者の立場での援助授与行動を最も行いやすいという結果を得ている。また、妹尾・高木 (2003) は、居住地域を中心にボランティア活動に従事する中高年層を対象とし、ボランティア自身が平常時のボランティア活動経験で、愛他精神の高揚や人間関係の広がりや人生への意欲喚起といったポジティブな成果を得、それらの成果によってボランティア活動の継続が動機づけられることを明らかにした。また、妹尾・高木 (2002a) は、高齢者大学生を対象に、援助行動経験が被援助者の立場での被援助行動に及ぼす影響を検討し、成功的援助行動の経験を持つ高齢者ほど、一層被援助に対する態度が肯定的で、動機づけが積極的であるという関係を実証している。これらの先行研究は、

¹ 本研究は、財団法人ユニベール財団に提出した調査報告書の調査データの一部を再解析し、加筆修正したものである。また、本研究の一部は、日本心理学会第67回大会 (2003) において発表した。

² 本研究の実施にあたり助成を下された財団法人ユニベール財団および調査協力者の方々に感謝致します。

Figure 1. 本研究の枠組み.

高齢者におけるボランティア活動の有意義性や、高齢者が現実問題に直面したときの適応的な援助要請と受容のあり方に関して有用な情報を提供している。

ところで、高齢者の心理的特徴について、藤田(2000)は、様々な視点での研究が高齢者に対する否定的ステレオタイプや否定的態度が存在し、高齢者を取り巻く社会状況と高齢者自身の個人的欲求との間に不協和が生じやすいことを指摘している。なお、そのような事態は、高齢者にとって精神的にストレスフルな状況と考えられるが、援助授与が援助者自身の生活ストレスに打ち勝つための有効な手段になるとの指摘がある(Krause, Herzog, & Baker, 1992; Midlarsky, 1991; 高木, 1998)。例えば、Krause et al. (1992)は、高齢者が援助を提供すれば、自己統制感が高まり、抑うつ感が低減すると報告している。援助授与が援助者自身の精神的健康に及ぼす効果について、高木(1998)によれば、一般に、援助者が有能で善良な存在としてポジティブに評価されるのに対して、被援助者が問題を自力で解決できない無能で怠惰な存在としてネガティブに評価される傾向がある。したがって、生活ストレス状態にある人がストレスゆえに援助を受容した場合にはネガティブに評価され、精神的健康に悪影響が及ぶが、逆に、ストレス事態に果敢に挑戦し、他者に援助を授与した場合には積極的に行為する能力を持ち続ける有能な存在としてポジティブに評価され、精神的健康が高まると論じている。つまり、援助を受容する立場にあるとして他者から処遇され、また、自己認識している高齢者が援助を行えば、主体的で積極的な、有能な存在として自他がポジティブに評価し、精神的健康が高まると考えられる。なお、Midlarsky (1991)は、高齢者が援助を行えば、次のような心理・社会的幸福・安寧感が期待できると指摘している。すなわち、(a)他者を助けることで、本来的に援助を受ける対象であるにもかかわらず、困っている人を積極的に助ける自分の姿を見て、低下している自尊心は回復する(自尊心回復)。(b)人に役立ったことで有意義な人生を送っているという充実感を味わい、やる気が生まれる(志気高揚)。(c)援助を通じて他者とのつながりを実感できる(社会的統合感)である。

しかしながら、援助者の立場での援助授与は、必ずしも被援助者に喜ばれて成功するとは限らず、“おせっかい”といった言葉に代表されるように被援助者に歓迎されないこともある。ところが、従来の援助行動と心理・社会的幸福・安寧感に関する先行研究の多くは、援助行動の指標として援助授与の有無や頻度、あるいはフォーマル・インフォーマルといった援助場面の効果が主として検討されており、援助授与の結果の効果は十分に明らかでない。

そこで、本研究では、援助授与後の援助者の認知的、感情的経験に着目し、援助者側の視座から、高齢者の心理・社会的幸福・安寧感に寄与する、援助授与の結果要因を検討する(Figure 1)。つまり、援助授与経験が援助者自身にとってポジティブな場合は、援助者の心理・社会的幸福・安寧感が高まるが、反対に、援助行動経験が援助者にとってネガティブな場合は、援助者自身の心理・社会的幸福・安寧感は抑制されると予想される。そこで、援助授与が援助者自身や被援助者にネガティブな結果を招いたとの認知やそれに伴う情動経験も含めた援助授与後の援助者の認知的、感情的経験の構造を解明し、これと、Midlarsky (1991)が高齢者が援助授与を通じて得ることが期待できると指摘した、自尊感情、志気、社会的統合感が実際に得られているかを検討する。

方 法

調査の対象者と手続き

被調査者は、兵庫県内の高齢者大学を受講中の高齢者587名である。2002年10月末から11月初旬にかけて、高齢者大学の教職員の協力のもとで、無記名自記式の質問紙調査を実施した³。具体的には、高齢者大学教職員を経由して調査票を配布し、被調査者が自宅等で回答した調査票を後日回収してもらい、回収された調査票を第1著者の自宅に郵送してもらう形式で実施した。なお、この調査は、高い回収率を確保する

³ 調査票には、後日実施を予定した聞き取り調査への協力を呼びかけており、協力しても良いとする回答者には記名(氏名と連絡先)を求めたが、自由意志からのものであり、そのことによる回答への影響はないものとする。

ために、図書券 500 円分の謝礼を準備し、調査票配布時に、配布を担当した高齢者大学教職員が、被調査者に手渡した。その結果、477 名からの回答が得られた（回収率：81.3%）。

質問紙の構成⁴

フェイスシート 被調査者の属性として、性別、年齢および現在の健康状態として生活自立度をたずねた。

援助授与と行動の測定 西川（1997）の日常生活における援助行動項目を松井・西川（2001）が高齢者向けに改訂した援助行動項目の中から 26 項目を選定した妹尾・高木（2002b）の高齢者用援助行動尺度⁵の中から因子負荷量の大きい、“健康を気遣っての電話”、“買い物の代行”、“講演会などの行事案内の通知”、“目的地への車での送迎”、“病院への同行”などの 13 項目を採用し、最近 3 か月間のそれらの授与経験の有無をたずね、“経験あり”を 1 点、“経験無し”を 0 点として、単純加算したものを援助授与経験得点とした（ $\alpha=.62$ ）。つまり、援助授与経験得点が高いほど、多様な援助を行っていることを意味する。また、現在、普段の生活の中で、誰に対する援助を行っているかについて、“子供や孫の世話”、“親の介護”、“配偶者の世話”、“知人・友人への援助”、“地域社会への奉仕”、“各種ボランティア活動”、“偶然居合わせた見ず知らずの人への援助”、の回答選択肢の中から選択することを求め、あわせて、その中でも最も力を入れている援助授与と行動を一つ選ぶように求めた。

援助授与後の認知的、感情的経験の測定 妹尾・高木（2003）の援助後の援助者の心理的效果（援助成果）に関する項目を参考にして、“相手が喜んでることが伝わってきた”、“自分自身も得るものがあった”、“嬉しい気持ちになった”などの 11 項目で構成した。なお、援助授与後の援助者の認知的、感情的経験には、援助者にとってポジティブな心理的経験だけでなく、援助の遂行がネガティブな結果をもたらしたとの認知やそれに伴う情動経験も含まれるという観点から、質問項目には、“余計なことをしたと後悔した”、“相手のプライドを傷つけてしまった”、“労力と時間を無駄にしたと感じた”の 3 項目も含めた。そして、上述の現在最も力を入れている援助行動について、“あてはまる”（5 点）から“あてはまらない”（1 点）までの 5 段階で評価してもらい、得点が高いほどそれぞれを強く感じているように配点した。

心理・社会的幸福・安寧感の測定 本研究では、高

齢者の心理・社会的幸福・安寧感の指標として、Midlarsky（1991）の知見に従って、自尊感情、志気、および社会的統合感を検討した。自尊感情は、Rosenberg（1965）が作成し、山本・松井・山成（1982）が邦訳した 10 項目からなる“Self Esteem Scale”を用いた。そして、各項目について、“あてはまる”（5 点）から“あてはまらない”（1 点）までの 5 段階で評価してもらい、得点が高いほど、自尊感情が高くなるように配点し、各項目の評価値の合計点を尺度得点とした（ $\alpha=.78$ ）。志気は、古谷野・柴田・芳賀・須山（1990）の 9 項目からなる“Life Satisfaction Index K (LISK)”を用いた。LISK は、高齢者の主観的幸福感を測定する尺度として開発された Lawton（1975）の PGC モラールスケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale）や既存の尺度に基づいて開発された尺度で、“去年と同じように元気である”、“年をとって前よりも役に立たなくなったと思う（逆転項目）”などの項目で構成されている。そして、各項目について、“あてはまる”（5 点）から“あてはまらない”（1 点）までの 5 段階で評価してもらい、得点が高いほど、志気が高くなるように配点し、各項目の評価値の合計点を尺度得点とした（ $\alpha=.72$ ）。社会的統合感は、Liang, Dvorkin, Kahana, & Mazian（1980）で用いられた項目を参考にして、“孤独を感じる（逆転項目）”、“自分には大切な人がいる”、“普段人とやりとりしている”などの 6 項目で構成した。そして、各項目について、“あてはまる”（5 点）から“あてはまらない”（1 点）までの 5 段階で評価してもらい、得点が高いほど、社会的統合感が高くなるように配点し、各項目の評価値の合計点を尺度得点とした（ $\alpha=.73$ ）。

結 果

回答者の属性

回収した 477 名の調査票のうち、記入漏れが多かった 6 名を除く 471 名を分析対象（男性 246 名、女性 222 名、性別不明 3 名、平均年齢 67.8 歳（ $SD=4.99$ ）、 $R=57-82$ 、 $M_0=69$ ）とした。彼らの健康状態については、“たいした病気や障害などもなく、普通に生活している”が 349 名（75.3%）、“何らかの病気や障害などはあるが、日常生活はほぼ一人で行えるし、外出も一人で行える”が 112 名（24.2%）、“何らかの病気や障害などがあって、日常生活や外出にある程度の不都合がある”が 2 名（0.4%）で、回答者が生活自立度の高い健康な高齢者であることが示された。

また、普段の生活の中で、高齢者が現在最も力を入れている援助は、経験率の高い順に、“地域社会への奉仕”（31.0%）、“各種ボランティア活動”（23.6%）、

⁴ 今回記載した以外にも調査項目は存在するが、今回の分析には使用しなかったため省略した。

⁵ 高齢者用援助行動尺度は、“精神的配慮”、“家事代行”、“社会参加の機会提供”、“移動”、“役割”の 5 因子からなり、これらの因子に高く負荷する項目を選択した。

Table 1
援助授与後の援助者の認知的、感情的経験の因子分析結果 ($N=381$)

	平均値 (SD)	F1	F2	F3	共通性
2. 相手の役に立てたと感じられた.	4.14 (0.81)	.746	-.225	.075	.613
1. 相手が喜んでることが伝わってきた.	4.17 (0.85)	.645	-.219	.219	.512
6. 必要とされていることに充足感を感じた.	3.97 (0.89)	.643	-.122	.264	.498
3. 誇りを感じた.	3.23 (1.13)	.490	.103	.318	.352
8. 相手の問題が解決した安堵感を得た.	3.22 (1.11)	.480	.178	.194	.304
9. 余計なことをしたと後悔した.	1.76 (0.96)	.095	.808	-.009	.662
11. 相手のプライドを傷つけてしまった.	1.67 (0.91)	.071	.776	.031	.607
10. 労力と時間を無駄にしたと感じた.	1.66 (0.89)	.022	.719	.100	.528
4. 自分自身も得るものがあった.	4.03 (0.93)	.206	-.075	.901	.860
7. 自分の勉強になった.	3.97 (0.96)	.300	.025	.632	.490
5. 嬉しい気持ちになった.	3.99 (0.89)	.486	-.132	.552	.558
因子寄与		2.25	1.95	1.79	
因子寄与率 (%)		20.41	17.73	16.26	

注) 回答は1=あてはまらない, 3=どちらでもない, 5=あてはまる.

“子供や孫の世話” (17.4%), “知人・友人への援助” (10.9%), “配偶者の世話” (9.1%), “親の介護” (4.2%), “偶然居合わせた見ず知らずの人への援助” (3.8%) であることが示された.

援助授与後の援助者の認知的、感情的経験の構造解明

援助授与後の援助者の認知的、感情的経験の構造を明らかにするために、援助授与後の認知的、感情的経験測定尺度 11 項目について、主因子法で因子分析し、バリマックス回転を行った。主因子法を用いて得られた各因子の固有値 (初期解における固有値の減少傾向は、第 I 因子から第 IV 因子まで、3.91, 2.23, 1.08, 0.70) を参考にして、3 因子を抽出した。バリマックス回転後の因子分析結果を Table 1 に示した.

第 1 因子には、“相手の役に立てたと感じられた”、“相手が喜んでることが伝わってきた”などの自らの援助授与が被援助者の役に立ったという実感に関する項目と、“必要とされていることに充足感を感じた”、“誇りを感じた”、“相手の問題が解決した安堵感を得た”といった援助者自身の誇りや安堵、充足感といったポジティブな感情経験に関する項目が、高い正の負荷を示している。これらは、援助授与によって、被援助者にも、援助した自分自身にも、ポジティブな効果がもたらされたとの認識で共通しているため、“ポジティブ効果感”と命名した (5 項目, $\alpha=.74$).

第 2 因子は、“余計なことをしたと後悔した”、“相手のプライドを傷つけてしまった”、“労力と時間を無駄にしたと感じた”が、高い正の負荷を示している。これらは、いずれも、自らの援助授与が、被援助者にも、自分自身にも、ネガティブな結果を招いたとの認

識で共通しているため、“ネガティブ効果感”と命名した (3 項目, $\alpha=.81$).

第 3 因子は、“自分自身も得るものがあった”、“自分の勉強になった”、“嬉しい気持ちになった”が、高い正の負荷を示している。これらは、援助授与による援助者自身のポジティブな感情経験や好ましい認識を示しており、“ポジティブ成果感”と命名した (3 項目, $\alpha=.79$).

各変数の年齢差および性差

回答者を平均年齢によって若年齢群 ($M=63.13$, $SD=2.76$, $N=197$) と高年齢群 ($M=71.34$, $SD=2.98$, $N=258$) に分類し、高・若年男女それぞれの、援助授与経験、援助授与後の三つの認知的、感情的経験、自尊感情、志気、社会的統合感について、性と年齢を独立変数とした 2 要因の分散分析を行った (Table 2). その結果、援助授与経験とポジティブ効果感およびポジティブ成果感において、性別による主効果が有意であり、男性よりも女性が日頃多様に援助を行っており、また、自らの援助授与を、被援助者や自分自身にポジティブな結果をもたらしたと男性よりも強く感じていた。また、ポジティブ効果感において、年齢と性別の交互作用が見られた。そのため下位検定を行ったところ、女性の場合、若年齢群よりも高年齢群が、高年齢群の場合、男性よりも女性が、一層ポジティブ効果感を得ていることが示された.

高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感の関連性

高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感

Table 2
尺度得点の平均と分散分析結果および変数間の相関関係

		年 齢	分散分析結果															
		若 年	年齢差	性差	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)							
		高 年	交互作用															
1) 援助授与経験	男	3.19 (2.26)	1.34	9.19**	—													
		3.69 (2.18)																
	女	3.83 (2.36)	0.01															
		4.10 (2.48)																
2) ポジティブ 効果感	男	−0.05 (0.81)	2.36		8.76**	.13*	—											
		−0.13 (0.91)																
	女	−0.00 (0.84)	5.78*															
		0.35 (0.80)																
3) ネガティブ 効果感	男	0.08 (0.86)	2.20			1.62	−.02	−.07	—									
		−0.02 (0.85)																
	女	−0.00 (0.96)	0.13															
		−0.18 (0.88)																
4) ポジティブ 成果感	男	−0.07 (0.80)	0.19				12.07**	.19**	.05	−.05	—							
		−0.21 (0.99)																
	女	0.17 (0.88)	0.97															
		0.22 (0.92)																
5) 自尊感情	男	34.96 (5.11)	0.19					0.37	.08	.24**	−.26**				.09	—		
		34.96 (5.31)																
	女	34.39 (5.64)	0.18															
		34.86 (5.79)																
6) 志 気	男	30.77 (4.77)	1.53						0.09	.08	.09			−.17**	.12*	.49**	—	
		30.22 (4.87)																
	女	30.70 (5.85)	0.03															
		29.98 (5.36)																
7) 社会的統合感	男	25.48 (3.82)	1.64							0.54	.20**		.21**	−.35**	.29**	.41**	.41**	—
		25.19 (3.73)																
	女	25.94 (3.67)	0.25															
		25.28 (3.97)																

** $p < .01$, * $p < .05$

の関連性を検討するために、自尊感情、志気、社会的統合感のそれぞれを目的変数とし、“ポジティブ効果感”、“ネガティブ効果感”、“ポジティブ成果感”を説明変数とする重回帰分析⁶を、男女別に行った (Table 3)。

その結果、男性の場合では、自尊感情へは、“ポジ

ティブ効果感”と“ネガティブ効果感”が、志気へは、“ネガティブ効果感”と“ポジティブ成果感”が、社会的統合感へは、“ポジティブ効果感”、“ネガティブ効果感”、“ポジティブ成果感”が有意な寄与を示し、“ネガティブ効果感”はいずれも負の影響を示した。

女性の場合では、自尊感情へは、“ポジティブ効果感”と“ネガティブ効果感”が、社会的統合感へは、“ネガティブ効果感”、“ポジティブ成果感”が有意な寄与を示し、“ネガティブ効果感”は男性と同様に、

⁶ 重回帰分析には、Figure 1 のモデルに基づき、援助授与後の援助者の認知的、感情的経験に関する変数 (ポジティブ効果感、ネガティブ効果感、ポジティブ成果感) のみを説明変数として投入した。

Table 3
自尊感情, 志気, 社会的統合感を規定する要因の重回帰分析結果 (男女別)

目的変数	説明変数	男 性			女 性		
		β	R^2	F 値	β	R^2	F 値
自尊感情 (男性: $N=189$) (女性: $N=155$)	ポジティブ効果感	.18*	.09	6.13**	.26**	.15	9.00***
	ネガティブ効果感	-.24**			-.25**		
	ポジティブ成果感	.06			.06		
志 気 (男性: $N=195$) (女性: $N=154$)	ポジティブ効果感	.04	.05	3.38*	.11	.04	2.26+
	ネガティブ効果感	-.17*			-.11		
	ポジティブ成果感	.14*			.11		
社会的統合感 (男性: $N=200$) (女性: $N=163$)	ポジティブ効果感	.22**	.23	19.92***	.08	.19	12.19***
	ネガティブ効果感	-.33***			-.30***		
	ポジティブ成果感	.29***			.28***		

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

いずれも負の影響を示した。また、女性では、援助授与経験と志気との関連はなかった。

考 察

本研究は、高齢者の援助授与行動に焦点をあて、援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連について検討した。その結果、一部の結果を除いて、援助者の立場で他者を援助し、その援助からポジティブな感情や認識を抱いた経験が、高齢者の心理・社会的幸福・安寧感と結びつく関係が明らかとなった。つまり、援助授与と行動が必ずしも援助者の心理・社会的幸福・安寧感を高めるのではなく、授与した援助の結果によることが示唆された。

まず、援助授与経験が寄与する心理・社会的幸福・安寧感は、男女で異なることが示された。男性では、成功的な援助授与経験は、自尊感情, 志気, 社会的統合感のいずれも促進するが、女性では、援助授与経験と志気との関連は認められなかった。また、性差は、日頃の援助授与と経験や援助授与後の認知的, 感情的経験においても確認された。男性よりも女性の方が、日常的にさまざまな援助に多様に携わっていること、さらに、女性が男性よりも、自らの援助授与を一層ポジティブに感じていることが明らかとなった。また、援助授与後の認知的, 感情的経験によって、自尊感情, 志気, 社会的統合感へ及ぶ効果が異なることが示唆された。今回検討した援助授与後の援助者の認知的, 感情的経験は、因子分析の結果、ポジティブかネガティブかだけでなく、援助の効果が誰に及ぶかに基づいて3因子が抽出された。ポジティブな経験に関しては、“ポジティブ効果感”、“ポジティブ成果感”の2因子が抽出されたのに対して、ネガティブな経験としては、“ネガティブ効果感”の1因子であった。これは、

ネガティブな反応に関する項目が少なかったことも一因と考えられる。この点については、今後の研究においてネガティブ反応の項目を増やすなどして検討することが必要と考える。

高齢者の援助授与経験が心理・社会的幸福・安寧感に及ぼす影響の中でも、社会的統合感への影響の強いことが示された。高木・妹尾 (2002) によれば、高齢者にとって援助とは、援助者あるいは被援助者の立場での身近な人との好意のやりとりを目的とした行動である。つまり、他者に対して自らの好意を表出し、その経験が自分自身にも他者にも効果的であれば、身近な他者とのつながりや社会との関わり感が一層実感されると考えられる。

本研究は、普段の生活で高齢者が援助者の立場で他者を助ける機会を持ち、その経験が成功的な場合は、心理・社会的幸福・安寧感が促進されるが、反対に、援助授与が被援助者や援助者自身に望ましくない結果をもたらした場合は、彼らの心理・社会的幸福・安寧感は抑制されることを明らかにした。しかしながら、ネガティブ効果感の各項目の平均値は低く、高齢者が日頃援助授与を通じてほとんど後悔や気まずさを感じていないことも示唆された。

藤田 (2000) は高齢者が社会に適応するには、加齢によって生ずる内的変化と外的変化を上手く処理する必要があると指摘しているが、この過程において、援助者の立場での援助授与と行動は、高齢者の個人的欲求を満たす行動として機能すると考えられる。したがって、今回の結果は、Midlarsky (1991) が指摘する“適応行動としての援助” (Helping as Coping) の一事例を示したと考える。しかしながら、今回検討した要因の分析における決定係数や標準回帰係数の数値は十分とは言えず、Midlarsky (1991) や中谷 (1997)

および藤田 (2000) が指摘するように、高齢者の心理・社会的幸福・安寧感是多様な要因によって規定されることが示唆された。その規定構造を今後検討する必要がある。また、援助授与行動と心理・社会的幸福・安寧感の因果関係を特定するためには、縦断的な手法を取り入れるなどの方法論上の工夫が必要と考える。

引用文献

- Fisher, J. D., Nadler, A., & DePaulo, B. M. 1983 *New directions in helping*. Vol. 1. *Recipient reactions to aid*. New York: Academic Press.
- 藤田綾子 2000 高齢者と適応 ナカニシヤ出版 (Fujita, A.)
- 古谷野 亘・柴田 博・芳賀 博・須山靖男 1990 生活満足度尺度の構造——因子構造の不変性——老年社会科学, **12**, 102-116. (Koyano, W., Shibata, H., Haga, H., & Suyama, Y. 1990 Structure of life satisfaction index: Invariability of factorial structure. *Japanese Journal of Gerontology*, **12**, 102-116.)
- Krause, N., Herzog, A. R., & Baker, E. 1992 Providing support to others and well-being in later life. *Journal of Gerontology*, **47**, 300-311.
- Lawton, M. P. 1975 The philadelphia geriatric center morale scale: A revision. *Journal of Gerontology*, **39**, 85-89.
- Liang, J., Dvorkin, L., Kahana, E., & Mazian, F. 1980 Social integration and morale: A re-examination. *Journal of Gerontology*, **35**, 746-757.
- 松井 豊・西川正之 2001 IV 近隣における高齢者への援助 人間・社会関係問題研究班(編) 人間・社会関係のダイナミクス——ミクロからマクロまでの多角的分析—— 関西大学政治・経済研究所 Pp. 125-164. (Matsui, Y., & Nishikawa, M.)
- Midlarsky, E. 1991 Helping as coping. In M. S. Clark (Ed.), *Prosocial behavior*. Newbury Park, CA: Sage. Pp. 238-264.
- Midlarsky, E., & Kahana, E. 1994 *Altruism in later life sage library of social research 196*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 中谷陽明 1997 高齢者の主観的幸福感と社会参加 下仲順子(編) 現代心理学シリーズ 14 老年心理学 培風館 Pp. 140-149. (Nakatani, Y.)
- 西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, **13**, 13-22. (Nishikawa, M. 1997 A study of helping behavior among housewives in everyday life. *Japanese Journal of Social Psychology*, **13**, 13-22.)
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 妹尾香織・高木 修 2002a 援助者に及ぼす援助行動経験の効果(4)——援助者、被援助者からのアプローチによる高木 (1997) モデルの検証—— 日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集, 816-817. (Senoo, K., & Takagi, O.)
- 妹尾香織・高木 修 2002b 援助行動の構造とそれらが及ぼす心理的效果——高齢者の助け合いに関する調査から(1)—— 日本心理学会第 66 回大会発表論文集, 108. (Senoo, K., & Takagi, O.)
- 妹尾香織・高木 修 2003 援助行動経験が援助者自身に与える効果——地域で活動するボランティアに見られる援助成果—— 社会心理学研究, **18**, 106-118. (Senoo, K., & Takagi, O. 2003 The effect of helping behaviors on helper: A case study of volunteer work for local resident welfare. *Japanese Journal of Social Psychology*, **18**, 106-118.)
- 妹尾香織・高木 修・箱井英寿 2000 シニア層のボランティア意識と実態 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 380-381. (Senoo, K., Takagi, O., & Hako, H.)
- Spacapan, S., & Oskamp, S. (Eds.) 1992 *Helping and being helped: Naturalistic studies*. Newbury Park, CA: Sage.
- 高木 修 1998 人を助ける心——援助行動の社会心理学—— セレクション社会心理学 7 サイエンス社 (Takagi, O.)
- 高木 修・妹尾香織 2002 高齢者による援助行動の実態とその効用に関する研究(1)——近隣社会における援助授受の実態と性別、年齢、ボランティア活動経験による差異—— 関西大学社会学部紀要, **34**, 143-183. (Takagi, O., & Senoo, K. 2002 Helping behavior and its function in the elderly(1): Local helping behavior and the effects of the sex, age, and volunteer experience. *Bulletin of the Faculty of Sociology, Kansai University*, **34**, 143-183.)
- 田尾雅夫・西村周三・藤田綾子(編) 2003 超高齢社会と向き合う 名古屋大学出版会 (Tao, M., Nishimura, S., & Fujita, A.)
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68. (Yamamoto, M., Matsui, Y., & Yamanari, Y. 1982 The structure of perceived aspects of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **30**, 64-68.)

——2003. 8. 15 受稿, 2004. 5. 22 受理——